

日本人内部の民族意識と概念の混乱

岡 本 雅 享

要約 2000年代以降、日本では反中・嫌韓主義や在日外国人に対するゼノフォビアが台頭し、それに同調する人々が増えてきている。しかし、中国人や韓国人に対峙する存在であるだろう日本人自身の内なる民族意識は、曖昧模糊として混乱している。インターネットでは「日本人の民族名は何というのですか」という質問が投げかけられ、学生たちは「自分が何民族か分からない」という。1980年代以降、政治家の単一民族発言が批判されながら、後を絶たないが、そのほとんどが単一なる民族が何民族かを語らない。その日本人の内なる民族構成と民族意識を明らかにすることが、今後ますます多民族化していく日本社会にとって重要な作業であるという認識にたつて、政治家の単一民族発言や、アイヌ先住民族決議への反発に表出された民族意識・概念を検証し、日本人の内なる民族構成を考察してみたい。

キーワード：日本民族、大和民族、出雲民族、単一民族、混合民族、民族のるつぼ

はじめに—日本人のわれわれ意識の源は何か？

冷戦崩壊後、民族紛争が激化した世界の各地で、自分が何民族に属し、どの宗教を信仰し、どんな言語を話すかで、生命や人生が左右される事態が頻発している。戦後の日本は民族を曖昧にし、民族問題を回避し続け、正面から取り組んでこなかった。戦後世代の頭の中には、民族という捉え方がインプットされていない。

大学の講義で「自分は何民族かと聞かれて答えられる人」と学生に尋ねたら、手が挙がらなかった。受講後の感想で学生たちはこう書いてくれた。

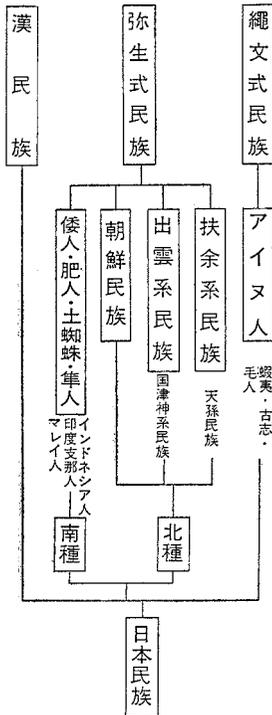
「自分がどの民族に属するかなど、考えたことも、意識したこともなかった」。

「私は自分が何民族であるか分からない。……自分が何かしらの民族に属しているなんて考えたことはなかった」。

別の学生は「私は何民族かということを日常的に自覚していなかったから、なぜ人々が国家や民族にこだわりを持つのか疑問だった」と書いている。

インターネット上では、「日本人の民族名は何というのですか。大和民族ですか」（2007年3月、Yahoo Japan! 知恵袋）¹、「我々日本人の民族名を教えてください」（お気軽Q&A、2008年9月）²という質問が投げかけられ、根拠不

図1 喜田貞吉（1871-1939年）の日本民族概念



出所：水野祐『日本民族の源流』雄山閣、1967年、46頁。

明の憶測が飛び交う。

「自分が何民族に属するか、考えたこともない」という意識は、歴史を振り返れば、圧倒的マジョリティである。「あなたは何民族ですか？」という問いかけ自体が、19世紀末までの日本では成立し得なかった。「民族」という漢字語は1880年代末頃の日本で、nationの原義を体現する訳語として創られたもので、それ以前東アジアに「民族」という概念（言葉）などなかったからである³。

1890年代の日本において「民族」という漢字語が創られてから、日本では国内の民族を表わす言葉・概念として「大和民族」「日本民族」「出雲民族」「天孫民族」という民族名が出現し、汎用されるようになった。戦前の日本は、これ

ら「～民族」という名を付する集団と、蝦夷、熊襲、隼人、アイヌなどによる「混合民族」国家であると言われていた。図1は、歴史学者・喜田貞吉（1871-1939年）の日本民族概念を、戦後、水野祐が図式化したものだが、日本民族が二層或いは三層構造からなる民族概念になっていることが分かる。扶余系民族というのは聞きなれない民族名だが、天孫民族とイコールとされているから、これが大和民族である。

日本は、民族国家の形成期に琉球、アイヌモシリ、台湾、大韓帝国を組み入れ、領土が拡大していったために、「日本民族」概念も一定せず拡大し、朝鮮民族をも含む概念となっていたが、敗戦により、帝国人口の三割を占める朝鮮人、台湾人を失ったところで、民族国家・日本の民族概念付け作業は止まってしまった。明治維新以降の統一国家形成の過程で、大日本帝国のマジョリティ民族として「大和民族」という言葉が政府によって用いられていたのは事実である。しかし、民族国家の枠組みが確固として定まらぬまま、大日本帝国が敗戦によって崩壊し、自律を失ったために、朝鮮民族もその中に含まれるという混合民族・複合民族の「日本民族」論が崩壊した後、戦後の日本国の下では、その再構築の作業は行われていない。つまり、日本における民族（nation）の形成は、途中で頓挫したままになっているのである。

1990年代のバブル崩壊、その後「失われた10年」と呼ばれた自身喪失の時代を経て、2000年代の日本では反中・嫌韓主義や在日外国人に対するゼノフォビアが台頭し、それに同調する人々が増えてきている。しかし、彼・彼女らの中で、中国人や韓国人に対峙する存在であろう日本人という存在の内なる民族意識は、曖昧模糊として混乱している。折りしも、本稿執筆中

に起きている中国の反日デモは、1990年代以降の愛国教育の影響だという分析もあるが、ある参加者は、近年の日本国内での反中国主義に対する憤りが、デモ参加の動機だと答えている。こうした「反日」「反中」の連鎖を増幅させないためにも、今一度、お互いの「われわれ意識」を見直す必要があると思う。本稿では以下、日本人の内なる民族意識の源泉とその混乱現状を整理し、考察してみたい。

1. 「単一」なる「民族」は何民族なのか—— 単一民族発言の不思議

1986年の中曽根康弘首相（当時）の通称「単一民族発言」以来、閣僚や国会議員による「単一民族発言」が問題にされてきた。これら「単一民族」発言を改めてみると、奇妙なほど、そのほとんどが（発言者も批判者も）、単一だという民族が何民族なのかを語っていない。

中曽根康弘首相（当時）は1983年8月、在日韓国・朝鮮人がいる広島原爆擁護ホームで「日本は単一民族だから泥棒も少ない」と発言し、抗議を受けているが⁴、「単一民族発言」という用語を、日本社会に定着させる契機となったのは、1986年の単一民族発言だといえる。発端は、中曽根首相が同年9月22日、自民党全国研修会（静岡県函南市）での講演で、「日本はこれだけ高学歴社会になって、相当intelligent（知的）なsociety（社会）になってきている。……アメリカには黒人とか、プエルトリコ人とか、メキシカンとか、そういうのが相当おって、平均的にみたら非常にまだ低い」と述べたことが、米国社会に伝わり、在米日本大使館・総領事館に抗議の電話が殺到し、メキシコ系議員連盟会長が発言撤回の声明を出すなどの抗議行動が生じたことである。中曽根首相がこれに

対し、「米国は……複合民族なので、教育などで手の届かないところもある。日本は単一民族だから手が届きやすい」（記者会見、9月24日）、「アメリカは多人種の複合国家で……教育等については必ずしも容易ではない、十分手の届かないところもある。日本は単一民族であるので、比較的教育は行いやすく手も届いておる」（衆議院、9月25日）と釈明・答弁したことで、さらなる批判が起こった。同（9月25）日、米下院に中曽根非難決議案が提出され、黒人企業家・企業・団体等は連名でNew York Timesなど有力紙に、「単一民族社会が複合民族社会より優れているという考え方自体が、もっとも悪質な人種差別である」と記した中曽根批判の全面広告（「尊大さか、それとも無知か」）を出した⁵。

これを契機として、1986年秋の国会で、民族をめぐる質疑応答が繰り返されることになる⁶。これらは、日本政府・閣僚の、日本における民族観が、用意された質問・答弁として、集中的に表明された稀有な機会である。したがって、その主要な論点を検証することは、政治家の散発的な「失言」などとは異なる次元の意味がある。以下、整理してみよう。

中曽根首相は、9月の段階では、単一なる民族が何民族なのか語っていなかったが、同年10月3日の衆議院で「やはり日本民族は同質性を持っている……日本は……同質性の強い民族の一つである、これはやはり客観的事実であろう」と、「日本民族」という民族名を挙げた⁷。この「日本民族」について、中曽根首相は同年11月4日の衆議院における答弁で「日本民族は、日本列島に先住していた民族が長い歴史の中で、南方系、北方系あるいは大陸系の諸民族と混合一体化して形成されたもので、ア

アイヌ民族もまたその中の一つであったと考えられるが、その子孫の方々が現存していることは事実である。そういう人をいわゆる少数民族と呼ぶか否かについてはいろいろの見解があり得る。「日本政府の考え方は……日本列島には北から大陸からあるいは南から大勢の人たちが入ってきて、そして融合して今の日本民族というものはできてきておる。その一つの要素の中にアイヌの皆さんもおった。先祖はそういう人たちであり、今はその子孫も現に残っておる」⁸と述べ、日本民族＝混合民族という見解を示している。

なお10月3日の発言は、不破哲三議員が中曽根元首相の拓殖大学総長時代の発言を紹介したことに対するものだったが、それによると中曽根氏は、指摘された学生向けの演説の中で「日本はカリフォルニア州ぐらいのちっぽけなところに、一億の民族が住み、世界最高の濃密社会となった」「日本民族は優秀なのであります」(1968年1月)、「わが日本には、一億の人口があり……愛国心に富んでいる民族であります。この一億人は、天照大神以来の大和民族と称しており、灘の生一本であり合成酒は入っていません」(1969年1月)と述べている(演説集「拓大一高生に告げる」)。

大和民族は「灘の生一本で合成酒は入っていない」一方、日本民族は「諸民族が混合一体化して形成されたもの」だというのなら、大和民族は日本民族を構成する諸民族の一つということになる。しかし、その大和民族が1億人もいるというのは、おかしい。

ともかく、日本民族＝諸民族が混合・融合・一体化してできたもの、という政府見解が1986年の時点で出されていることは、おさえておくべきことである⁹。これは小熊英二『単一民族

神話の起源』が詳細に検証した、戦前の混合民族論と同じであり、戦後の日本政府もそれと同じ立場をとることを示したことになる。アメリカ合州国が「人種のるつぼ (melting pot)」だとすれば、日本は「民族のmelting pot」というところか。

しかし、はたしてとけきっているのか？ 戦前の混合民族論では、天孫民族、出雲民族、朝鮮民族、漢民族、蝦夷、熊襲、隼人など多種多様な民族名が使われており、確かに「アイヌ民族もまたその中の一つ」であった。日本民族を形成した諸民族の一つであるアイヌ民族が、melting potの中で溶けきって、もともとの民族性を失っているというなら、大和民族も同様のはずだ。アイヌ民族や大和民族が融合しきっておらず、民族性を保持しているというなら、他の民族が融合して、あとかたもなく、なくなってしまうと言うこともできまい。

アイヌ民族や大和民族を混合民族の中から取り出すことになれば、その他の民族も、元のルーツに従ってどんどん分けだしていくことができる。1973年には斎藤邦吉厚相が「アイヌは日本国民の中の別な民族である、とは考えていない」との見解を示し、また自由権規約の第1回報告書(1980年)で「本規約に規定する意味でのマイノリティは我が国には存在しない」(国連文書CCPR/C/10/Add.1)と記した日本政府代表が、その審議(1981年、国連欧州本部)で「19世紀の明治維新以来のコミュニケーション・システムの急速な進歩のため、この人たち(アイヌ人)の生活様式に特殊性を見出すことは困難」(CCPR/C/SR.324, paragraph 45)と発言したのも、このあたりに関係があると思われる。

国会審議に戻ろう。中曽根元首相は、1986年

10月21日、衆議院における児玉健次議員の質問に対する答弁で「日本の国籍を持っている方々でいわゆる差別を受けている少数民族というものはないだろう。国連報告にもそのように報告していることは正しい¹⁰と発言し、さらに広範な批判を招いた。この関連で「昭和55年に国連へ提出した国際人権規約B規約第1回報告書においては、本規約に規定する意味での少数民族は我が国に存在しない旨報告している」（10月31日）¹¹、「日本国民は憲法の下で法的、制度的にすべて平等に権利を保障されており、国連人権規約第27条に言う権利を否定され制限された少数民族というものは我が国に存在しない」「日本国籍を持っておる人たちで、今の国連規約との関係においていわゆる少数民族と言われるようなものは日本にはありません、そういう報告を国連に出している」（11月4日）¹²などと発言したことは、国際人権規約の実施報告書の存在を知らしめ、それに対する関心を高める結果ともなった。

11月末に至ると、この問題に古くから関与してきた文部省の見解が、国会で表明され始める。衆議院文教委員会では、「文教行政の基本施策」をめぐる質疑応答の中で、塩川正十郎文部大臣が「日本にはいろいろな民族がおると、そうはやはり私は解釈をいたしません。……ルーツはたくさんあったけれども……文化的に見ました場合に、日本民族はやはり一つの民族になっているのではないか」（11月26日）¹³、「今同じ文化的な生活をしておる者、こういうことでは日本列島は現在一つの民族という解釈も成り立たないことはない」（11月28日）¹⁴と発言した。「現在一つの民族」と言い切れなかったのは、文部省の見解というより、同じでなかった時代を肌身で知る、大正（1921年）生まれ

の塩川大臣の実感のなせる業だったのではないかと思われる。この答弁は、民族・種族的にはルーツの異なる人々が、同じ文化的な生活を通じて、一つの民族になるという民族論であり、様々な民族・種族の存在を、否定してはいない。

その際、教科書の記述に関して、文部省初等中等教育局の面崎清久局長が「日本のようにほぼ一つの民族から成る国」とか「国民の大部分が一つの民族から成っている西ドイツや日本のような国」という表現が多く、「単族国」という言葉が使われている教科書も1冊許容していると答弁した。面崎局長は、「単族国」という言葉の定義は「国民が主に一つの民族から構成されている国家」で、例えば日本とかイギリス等であるとした上で、第一学習社の『新編地理』では「単族国はまとまりがよく、同胞としての意識に富む」という表現があることを明らかにした。ただし、「単族国」という言葉は、純粋の同一民族というものは今の世界であり得ないという前提の下で使われているものの、語感・配慮の点で問題があるので、改訂の時期に著者側と協議したいと付け加えている¹⁵。

1988年春の国会で、「文教行政の基本施策」をめぐる民族問題が議論された際、「日本は単一民族によって構成されている国だと思いませんか」という江田五月議員の質問に対し、中島源太郎文部大臣は「ほぼ単一民族というのが正しいのだそうです。私は……歴史の流れの中で……いろいろな血がまじり合ってそれぞれの民族、それぞれの国ができておると思う。ほぼ単一という表現が正しいとすれば、文部省的にそれが正しいのだと思いますが……いろいろな血がまじり、いろいろな民族の交換というかまじり合いがあり……文部省的な表現ではほぼ単一民族」と、主体性のない、歯切れの悪い答弁を

した。戦後長らく民族問題を回避してきた政治家の有り様がうかがわれる。これに対し、1986年秋の国会でも答弁した先の面崎清久文部相初等中等教育局長は、「教科書の扱いにおきまして単一族とか複合民族とかいろいろ言葉があるが、我が国におきましては大和民族、アイヌ民族いろいろございます。……純粋な意味での同一民族で構成された国はまずまれでございまして、ごく少数の民族が含まれている場合は俗に単族国と言われる場合がある。そういう意味では単族国という言葉も不正確ではない」としながら、「教科書等の記述においてはほとんど多くの構成員が一つ大和民族というふうな形で記述されるのが正当かと考えております」と述べている¹⁶。政と官、どちらが主役か、分からなくなるような対照的な答弁だが、1986年秋の国会審議で閣僚の誰一人として出さなかった「大和民族」という民族名を、官僚があっさり口にしたのは、戦前からの教科書記述の前例に依拠したものと思われる。

地理教科書ではすでに明治期から、日本の民族構成に関する記述がある。例えば、明治37（1904）年発行の『地理教科書』（志賀重昂著、富山房、訂正再販）は第4章「日本帝国人文誌」第1節「住民」でこう記している。「我国の住民は大概蒙古種に属す。然れども台湾の蕃種にはマライ種あり、ポリネシア種あり。全国を概するに蒙古種なる大和民族最も多数を占め、琉球人及び台湾の支那族は蒙古種なれども大和族と異れり。北海道のアイヌの種族に関しては種々の異説あり。此の如く我国の住民は多数の種族に分ると雖も、歴代の威徳に依り、一家兄弟の如くに融和して、日本帝国民なる一団に結晶し居れり」（31頁）。

昭和期に入って、文部省著作・発行で作られ

た国定地理教科書を見ると、『尋常小学地理書（巻1）』（第四期、1935年）は、第一「日本」の「国民」の項で、以下のように記している。「国民の総数は9000万を超え、その大部分は大和民族であるが、朝鮮には約2000万の朝鮮人、台湾には支那から移住した約430万の支那民族と、10余万の土人とがある。又北海道には少数のアイヌ人、樺太には少数のアイヌ人とその他の土人がいる。諸外国に移住している大和民族は約60万である」。

だが、この大和民族は、当初から由来や根拠や枠組みが曖昧な概念だった。

大和民族は、大日本帝国憲法制定期に誕生した概念である。「大和民族」という言葉を流行らせたのは、志賀重昂だと言われるが、その志賀が雑誌『日本人』で、「大和民族」という言葉を初めて使ったのが、1888（明治21）年である。松本芳夫『日本の民族』（1954年）は、「天孫民族はまた大和民族と称され、……その由来を論ずる場合、まず神話をよりどころとなすのである」と記している¹⁷。その神話は記紀—古事記（712年）と日本書紀（720年）—の神話を指している。1867（慶応3）年の王政復古で「諸事、神武創業之始」に原づくると宣言し、幕府と撰閣制を廃止し、日本書紀の「一書」一本文の後に載っている別伝承—が記す「天壤無窮の神勅」に基づいて、大日本帝国憲法（1889年）の第1条と第3条（天皇の統治大権及び神聖不可侵の特権）を定めた明治政権下で誕生した大和民族という民族名が、初代（神武）天皇のもとの名・カムヤマトイワレヒコに由来するものであることは、想像に難くない。だが、大和民族は、記紀に基づく名称ではない。

「大和」という語の初出は、天平宝字元年（757年）実施の養老令の田令36条であり、記紀

には（「倭」「大倭」という語はあるが）「大和」という語は一ヶ所も使われていない¹⁸。江戸時代における大和は、列島に住む多くの人にとって、「大和国」という68諸国中の1国名を指す名称としか意識されていなかったと思われる。

大和民族概念の生みの親ともいえる志賀は、奇妙なほどその由来や起源を示していない。志賀が大和民族という言葉を使い始めた1888年から、10数年後に書かれた檜山鋭『対外日本歴史』（文会堂、1904年）は、大和民族には広義—数種族の混化したるものに附したる名—と狭義—その中のある単一種族に附したる名—の「二義あるが如し」で、「世の大和民族論を唱ふるもの」が、その「区別を立てずして漫然種々の説を立つるは誤れりと謂ふべし」と記す¹⁹。檜山によれば、広義の大和民族とは「現今の日本国民の総称」であり、狭義の大和民族とは「イザナギ・イザナミの二尊の御一族及び其率いられたる部下の民族」だが、「世の日本人種論を唱ふるもの、多くは此狭義の大和民族を目的とするが如し、然れども其論断の材料とするものは広義の大和民族より採れるものなり」と記しており、種々の説が漫然と飛び交って、概念整理が難しい状況に陥っていることがうかがわれる。

それから約40年後の1942年、厚生大臣の命令で厚生省研究所人口民族部が作成した『大和民族を中核とする世界政策の検討』は3000頁を越す大作であるが、ここでも、中核となる大和民族の検討が全く見られない。第三分冊第6篇第1章4節が「大和民族の成立」と銘打っているが、本文には「大和民族」という用語すら全く登場しない。同節第3款は「大和民族文化の確立」と銘打つが、何が大和民族の文化なのか、全く説明がない。大和民族という言葉は、誰が

大和民族で、何が大和民族の文化で、何が大和民族の言語で、何が大和民族の宗教なのか、内実をはっきりさせないまま、飛び交っていたとしか思えない。ただし、第6篇第1章4節の第1款「日本民族の系統に関する諸説」では、「日本民族を以て単一人種構成を持ったものでないとする点……は何人と雖も異論のない事実であろう。われわれ日本人は体質的にも文化的にも極めて複雑な構成を有して居る」（2202頁）という執筆者の見解が記されている。

以上の点から見ても、大和民族という概念には、当初から、きちんとした解釈が存在せず、大和民族の枠組みも人によってまちまちだったことが分かる。誰が大和民族なのか？今の日本で、どれだけの人が自分は大和民族だと思っているだろうか？1988年の国会審議で、文部省官僚は「教科書等の記述においてはほとんど多くの構成員が一つ大和民族というふうな形で記述されるのが正当」と述べたが、大和民族なる概念は、今に至るまで曖昧で、確立していないのである。

この後も、1989年の古川清・駐道大使の「民族問題というのは、日本人にはごさいませんから、分かりにくい」「日本ぐらい単一民族で、一つの放送で、日本語で1億3000万の人間が全部分かるのは珍しい」（3月14日、根室市）という発言、1991年の宮沢喜一首相の「日本は単一民族に極めて近い国」という発言、1995年の山崎拓・元防衛庁長官の「一民族、一国家、一言語の日本の国のあり方がこれほどの国力をつくり上げた」という発言など、閣僚の「単一民族」発言は続く。だが、いずれも単一なる民族が何民族かは明かしていない。

2000年代に入っても、「小さな国土に、1億2600万人のレベルの高い単一民族できちっと

詰まっている国。この人的資源があったからこそ、あの大東亜戦争に負けて、原爆まで落とされて、いまだにアメリカに次いで世界第2位の経済大国の座を守っている」(平沼赳夫経済産業相、2001年7月2日、自民党国会議員政経セミナー、札幌市)、「日本という国は……一国家、一文明、一言語、一文化、一民族。他の国を探してもない」(麻生太郎総務大臣、2005年10月、九州国立博物館開館記念式典の祝辞中)²⁰など、閣僚による単一民族発言が続くが、やはり単一だというその民族が何民族なのか明らかにしていない。単一民族発言を批判する側でも、アイヌ民族や在日コリアンの存在を挙げて反論するのが一般的で、それ以外は単一だという思いに、なんとなく浸かっているように思える。

2001年11月の尾身幸次沖縄・北方担当相の「日本は単一民族で、日本人といえば大和民族だ」という発言は、例外といえよう。尾身大臣はこれに続けて「人種と国がだいたい合っているという意味において……まったく特殊な国である」「同一民族、homogeneous(同質)な社会で、競争より協調性を重んじるようなシステムがある。これが戦後50年近くは強みだった」「homogeneousな人種構成をとっている日本がそのことをしっかり自覚して効率的・競争的・弾力的な社会に変えていかなければならない」と述べている²¹。

そんな中、2007年2月下旬、「根っからの京都人」を自称する伊吹文部科学大臣の口から「大和民族が日本の国を統治してきたことは歴史的に間違いない事実」「極めて同質な国」「一つの民族が多くの国民を占めている」という発言²²が飛び出した。一般には、閣僚の単一民族発言の一つと見なされているが、この発言は「大和民族が日本の国を統治してきたことは

歴史的に間違いない事実」という歴史認識を承認するのか、「大和民族が多くの国民を占めている」という民族意識を共有するのか(いったい誰が大和民族なのか)という、次元の異なる、日本人のアイデンティティの根本に関わる重要な問題を提起している。

すでに別稿「日本における民族の創造」(『アジア太平洋レビュー』5号、2008年)で述べたように、記紀神話に登場する架空の初代(神武)天皇のもともとの名・カムヤマトイワレヒコに由来する大和民族は、大日本帝国憲法制定期(の1888年)に誕生した概念である。大和(天孫)民族という概念は、記紀神話に民族のルーツを求めて創出されたものだが、記紀の時代に遡った民族設定は、同時に、倭〔ヤマト〕に「まつろわぬ」人々とされた出雲民族、蝦夷、熊襲・隼人という民族概念も生み出した。松本芳夫『日本の民族』(1954年)は、「天孫(大和)民族の由来を論ずる場合、まず神話をよりどころとなす」のであり、「(出雲の)国譲りを契機として、(皇室の起源と)天孫民族の由来が発足する」という。大和民族の誕生から8年後の1896年、出雲民族という概念が登場したのも、記紀神話に基づく民族(意識)形成による必然の帰結といえよう。それが戦前の(内なる)混合民族論の根拠となった。敗戦による植民地喪失で、朝鮮民族や漢民族、台湾や樺太先住民族等を含む(外なる)混合民族論の根拠は消失したが、「内なる混合民族論」は、戦後の1960年代以降、「名無しの単一民族観」が広がる中で、きちんと顧みられることなく、現在に至っている。

2006年6月、北海道ウタリ協会(現「アイヌ協会」)を訪れた時、佐藤事務局長に拙稿「日本のマジョリティは何民族か」(月刊『イオ』

2006年4月号)をお見せしたら、加藤忠理事長の日本文化人類学会における発表原稿が掲載された『先駆者の集い』2006年3月号を見せて下さった。その発表の中見出しの一つに「日本のマジョリティは何民族か」という、期せずして全く同じタイトルが含まれていたため、驚いたが、そこには私がまだ知らなかった事実が紹介されていた。

外務省・国交省は2001年、北海道ウタリ協会の照会に対し「日本のマジョリティ・グループの名称は存在しない」と回答した。これは、政府が2000年1月、国連に提出した人種差別撤廃条約の国内実施報告書(国連文書CERD/C/350/Add.2, 26 September 2000)の記述に関し、同協会が外務省の報告書作成担当者に質問した際の返答である。報告書はアイヌ民族関連の記述で「Wajin (和人)」という用語を使っており、それは「all other Japanese, except the Ainu (アイヌ以外の日本人)」を意味するとの注釈がついている。するとOkinawanやKorean Japaneseなども、みな和人になる。いっぽうアイヌ民族も含む日本人(Japanese)が民族集団の名称であるはずはない。これは中国人(Chinese)が、中国が公認する56民族の総称であり、その中のマジョリティは漢(Han)民族であることと比べれば、分かりやすい。するとJapaneseの中のマジョリティ民族は一体何だと、協会側が疑問に思ったのも無理はない。

締約国の条約実施を監視し、報告書を審査する人種差別撤廃委員会は、締約国に対し、第1条にあたる住民の人口構成に関する関連情報を報告するよう求めている(General Recommendation 4)が、政府報告書は「我が国では、人口を調査する際、民族性(ethnic

viewpoint)といった観点からの調査は行っていないので、日本の人口の民族構成(ethnic characteristics)については必ずしも明らかではない」と記している。報告書本文の中に、日本民族や大和民族という表現は一切登場していない。

加藤理事長は、前記の論考で「日本文化人類学会においても、日本のマジョリティ・グループの名称は、確と定まっていない筈である」と指摘し、「日本は『民族』の用語使用について、無頓着で厄介な国になってしまっている」「日本では『人種』『民族』についての認識が乏しく……公教育や教科書で正しく取扱われていない」との問題意識を提示し²³、その中で、2000年5月17日の参議院憲法調査会における石毛直道・国立民族学博物館館長(当時)の意見に言及している。憲法調査会の議事録を見ると、この時、石毛館長は「島津が沖縄(原文ママ)に侵略したり、或いは明治になってから沖縄県の設置がなかったら、多分今は沖縄県の人々は、我々の日本民族と違うもう一つの民族になっていたかもしれない」と述べている。その沖縄に関し、石毛館長は「民族は……政治的につくられる集団でもある」「沖縄もそういった例である」として「明治政府によって一方的に、お前たちは日本国民だ、日本人だということにされて、方言だとかそういったのに取って代わって国語教育を軸とする同化政策がなされた」と述べている。しかしこれは沖縄のみならず、民族国家「大日本帝国」に統合された列島諸国の人々にも、当てはまることである。幕末・明治初めの日本列島は「言語不通」の状況であり、「東京山の手」の教育ある中流階級の人々の話す言葉を基にして創られた人工的な国語が1900年に学校教育に組み込まれ、「国こ

とば」に代えて教えられたし、藩主を統治者とする藩・諸国に分かれ、また士農工商という身分階級に分かれていた人々の間に、同じ「日本国民」「日本人」というわれわれ意識もなかった。

関曠野「民族と民主主義—曖昧な日本人の認識」(『朝日新聞』2003年8月12日夕刊)は、「日本人は形の上では国民であるが、歴史的に見れば民族として自らを形成した国民とは言い難い。……日本が幕末に開国し世界各国に独立国として主権を承認された時に初めて、日本人が民族になる可能性が開けたと言える。それまでは今日本人と称されているエスニック集団が日本列島に住んでいただけである。しかしながら、明治維新が、日本人が民族になる可能性を封じてしまったから、日本人は潜在的に民族になったにすぎなかった」と指摘している。

2. アイヌ先住民族決議への違和感と民族概念の混乱

2008年6月6日、国会が「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を採択すると、政府は即日、官房長官談話を発表し、アイヌ民族が「日本列島北部周辺、とりわけ北海道に先住し、独自の言語、宗教や文化の独自性を有する先住民族である」と認めた。この決議・談話に関するインターネット上の書き込みを見ると、現代日本人の民族概念の混乱が、顕著に見受けられる。

「アイヌ民族関連報道クリップ」(blog.goo.ne.jp/ainunews)や、「アイヌ・沖縄を考えるブログ」(blog.namako.versus.jp)に書き込まれた意見の中から、民族意識・民族概念が表出されているものを抽出してみよう。以下、意見を整理するため、(a)(b)(c)等の記号をつけてお

く。

まずは「大和民族こそが日本の先住民族だ」という民族意識が、アイヌ民族を先住民族と認めることへの反感を伴って、表出しているものがある。

(a)「アイヌ民族だけを先住民族とすることを求める決議に、違和感を覚える人は少ない。大和民族も先住民族と併記するべきだ。……大和民族の中の蝦夷は、アイヌと共通する文化がある。……熊襲、隼人の位置づけは、どうなるか。琉球も入れないといけない」²⁴。

(b)「本州の先住民族は大和民族です。……本州において、大和民族にのみ付与され、アイヌ民族には付与されない特権を作るべきではありませんか」²⁵

アイヌ民族を先住民族とする決議が、彼・彼女らの大和民族意識を刺激したものと思われる。

(c)「アイヌ側の言い分(先住民族としての承認)は、他の民族(琉球民族、大和民族、蝦夷など)への配慮に欠けている。……日本の場合は、後住(後で住み着いた)民族は、どこにいるのか」²⁶。

という意見も、同様に大和民族も先住民族だという意識の表れだろう。ただし、(a)が蝦夷〔エミシ〕を大和民族の一部とし、琉球は違うとするのに対し、(c)はいずれも別々の民族と認識している。このような民族の境界線をめぐる不一致は著しく見受けられる。これら「大和民族こそ日本の先住民族だ」とする主張に対し、日本には先住民族は存在しない(=大和民族も先住民族ではない)という、以下のような主張もある。

(d)「日本は……世界に冠たる単一民族国家であり、先住民族などはどこにも存在しない。

……アイヌは6世紀以来、頑として日本人の一部だった」²⁷。

日本という国号が登場したのが7世紀末なのだから、6世紀に日本人と称し得る人々などいかなかったし、19世紀半ばまでは、アイヌモシリ（北海道）も琉球（王国）も、明らかに日本ではなかった。現在の領土の枠組みを、そのまま過去に投影し、その中にいる者がすべて、古代から単一・同一の民族であったという発想は、現在の国家体制の悠久性・正当性を主張したいという意識がもたらすものといえるが、明治維新（1867年）から沖縄復帰（1972年）までの日本の国境の著しい変化を見るだけで、成り立たない話である²⁸。ただ、こうした主張は、日本特有のものではない。中国は秦漢の時代より現在の中国の領域、民族からなる統一国家であったという「中華民族」論、及び中国の領域内には先住民族は存在しないという中国政府の見解ともよく似ている²⁹。「日本人の一部」であることと、先住民族であることは矛盾しない。その両立を認めたがらない真意は不明だが、(a)の場合、単一だという民族が何民族なのか、不明である。インターネット上に出された「我々日本人の民族名を教えてください」（お気軽Q&A、2008年9月）³⁰という質問に対し、「単一民族という前提ですから、日本には民族名はありません」とした回答者がいたが、質問者から「多民族国家で国民（全体）を一つの民族名で表せないというなら分かるが、単一民族だから呼称がないというのは矛盾する」と、きり返されている。その点、以下の(f)は「自分が何民族か分からない」と率直に明かしている。

(f)「先住民族として認めてどうなるのですか。今は日本国民でしょ。日本国民の中で差別化を図ることは、民族の対立を招くことにな

りかねません。……私は自分が何民族か知りませんが、正直そんなこと考える事がおかしいと思いませんか。今は国同士が争っている時代です」³¹。

民族問題に対応する思考経験が育まれていないのだろう。民族差別に負けないよう、マジョリティに与えられた負の民族イメージを払拭することで、民族的アイデンティティを確立しようとしている人に対し、「自分が何民族か考えることがおかしい」というのは、心無い言葉である。なぜ、日本国民の中に、アイヌ民族差別を行う者がいるのか。それをなくしてからでなければ、言えないはずの言葉であろう。全世界を二極化した冷戦の下、東西両陣営の国家群間の対立の中で、下位問題として押さえつけられていた民族間の軋轢が、冷戦構造が崩壊した1990年代以降、各地で噴出した。国同士の争いが優先するから、民族間の軋轢は持ち出すなというのは、それぞれの国家の中でのマジョリティ民族の身勝手な発想である。

いっぽう以下の二つの意見は、典型的な「民族のるつぼ論」といえる。

(g)「日本民族にほとんど同化吸収されてしまったアイヌを、いまさら分離する必要がどうしてあるというのだろうか」^{32 33}。

(h)「日本は先週まで単一民族国家だった。……良くも悪くも日本は国民統合に成功した国だ。アイヌも琉球も、地方の伝統文化に過ぎなくなった。……そんな状況が変わった。アイヌが先住民族と認められ、国民の中に民族というラインが引かれた。アイヌが民族なら、それ以外は自動的に大和民族となり、どちらでもない琉球人もまた民族となる。……これは重大なことだ。「国民」と「個人」の間に「民族」という枠が突如生まれたのだ。……アイヌが独立

を主張すれば、大和民族はそれを否定する権利を持たない。沖縄にしても同じだ。6日のこと〔2008年6月の国会決議と官房長官談話一筆者〕は、……憲法改正などよりはるかに大きく、国家の形を左右する出来事だったかもしれない³⁴。

2010年3月末には、前述のアイヌ先住民族決議（2008年6月）を受けて、小学校社会科教科書で「アイヌ民族のほこり」を盛り込んだ光村図書出版の編集者が「未だに『日本は単一民族』と間違える人もいる」と、その意図を語ったという記事（「教科書検定『毎日新聞』2010年3月31日）に対して、インターネット上で同様の意見が書き込まれた。以下、同年4月2日、「2ちゃんねる」に書き込まれた意見を、いくつか抜き出してみる³⁵。

まず、前述した「民族のるつぼ」論と、同種の発想が見受けられる。

(i)「事実上ほぼ完璧に同化しているじゃないか。沖縄もそうだし、わざわざ記載する必要があっても思えない」(15Zjquj80)

(ii)「日本は単一民族だ。言語をとっても、生活習慣をとっても、すでに日本民族とでもいえる大枠に吸収されている。アイヌなんてものはないし、大和民族もとっくに鬘を切り、和服を脱いでいる」(fmvh2C3i0)

(iii)「アイヌ民族、琉球民族、大和民族まで含めて日本民族です。日本民族は古代各民族のハイブリッドです」(uWKjOnYE0)

そして、ここでも「〇〇民族」「〇〇国民」「〇〇人」という概念の混乱が見られる。

(iv)「アイヌをアイヌ人というなら、俺らは何人？日本人って言うの？」(Skbmd6LA0)

(v)「アイヌが日本民族と別というなら、琉球や熊襲、蝦夷だって別民族だ」(nGBwU1ak0)

(vi)「在日朝鮮人が帰化すれば、日本民族なのか。そもそも、日本民族なんて定義できるのか。」(FToxJ90BP)

(vii)「そもそも、日本民族という考え方がない。あえて言うなら大和民族だ」(WC8/LjHN0)

(viii)「そもそも民族って概念自体が日本にはない。日本人だ」(4uAWt+8G0)

民族概念がないのなら、なぜ日本で民族差別が起こるのか？マジョリティ民族が、特定の集団を、自分たちとは異なる民族だと認識して行うのが民族差別であり、日本に朝鮮民族差別やアイヌ民族差別が、広範に、また根強く存在することは、国際的に知られていることでもある。民族差別はマイノリティ民族を見下し、社会的に貶めようとする。それに打ち勝つために、マジョリティが描くマイノリティ民族の像・偏見にかわる自分達の民族像を描く必要がある。実際、マイノリティ民族に属する人々に民族意識を抱かせるのは、マジョリティ民族の差別や偏見であることが多い。先住民族概念は本稿の検討課題ではないので、ここでは論じないが、先住民族としての権利も、マジョリティ民族による偏見や差別と闘うためのツールである。

3. 日本は民族のるつぼか？

網野善彦は以前、日本列島の本州・四国・九州の社会に見出される顕著な差異は、同一民族内の地方差にすぎないのか、それとも日本人の Ethnic Identity を崩壊させるほどのものなのか、と提起した³⁶。ベネディクト・アンダーソンは民族国家 (Nation State) を「想像の共同体 (Imagined Community)」と名づけたが、民族を、民族たらしめるものは、つまるところ歴史や文化によって裏付けられる民族意識

であろう。中国政府が行った「民族識別」事業と、それに起因する文化大革命後の2000万人に及ぶ民族的出自の回復・変更、そして建国から半世紀以上経っても「未識別民族」が相当数存在する現状を検証してきた筆者からみれば、民族は科学的な分析で区別しきれものではない。世界を見渡せば、網野氏のいう日本列島内の「顕著な差異」よりも差異が少ない集団が別々の民族だという自己意識をもち、他者からも認められている事例を挙げるのは、難しくない。別々の民族であるというアイデンティティを形成しようと思えば、それが可能な差異である。それは個人や集団が自らの意思で決めるべきことだが、日本の問題は、自由な選択を行うには甚だ情報に偏りがあり、「顕著な差異」が「単一民族・単一文化」といった幻想で隠蔽されているという点である。

1934年から36年にかけて、郷土誌『島根評論』に18回にわたり「出雲民族考」を連載（昭和9年3月号～昭和11年1月号）した徳谷豊之助は、「はしがき」で「予は小学に通ひし頃、他国人に接し其言語を聴く毎に、そが我が出雲語と著しく相違せるに気づき、……まことに奇異の感に打たれざるを得なかつた。……我出雲人はどこやら他国人とは一種異なつた所があるやの感じがしてならなかつた」と述べ、また最終章では「往昔の出雲民族」と「現今の出雲人」の間に民族的な大きな変化はなく、今日（昭和10年代）の出雲人には、体質、骨格、容貌等の生理状態、及び性格においても、出雲民族固有の一定の特質があると結論している³⁷。これは、出雲人の自己認識であるが、近代国家成立以降、島根県東部とされた隣国・石見（島根県西部）出身の作家・田畑修一郎³⁸も、著書『出雲・石見』（1943年）で、「幼さいときから、出雲と

いふ所をごく近くに在りながら、一つの異国のやうに感じて育つた。言葉がまるでちがひ、したがって人の気質もちがふのが、子供心に異様に思はれ」たと記している³⁹。出雲国境に近い石見東部・温泉津出身の小説家・難波利三⁴⁰も、1980年代半ば、「出雲と石見の地理的条件の違いは、そのまま住民の気質にも表われている」「得体の知れないという感覚もあって、住む人間ともども、出雲はいまいち、分かりにくい」と述べている⁴¹。

時間は前後するが、1921（大正10）年7月には、出雲民族社が月刊誌『出雲民族』を創刊している。創刊号には、「出雲民族の出現を喜ぶ」「真直に歩め出雲民族の群れ」「出雲民族の真摯な歩みを祈る」などの祝辞が寄せられた。また同年4月発行の『神日本』第3号に、岡垣義人「出雲民族の為に」という文章が掲載されているが、これは、出雲人を侮辱した作家に対し、「余は出雲民族の一人として此処に彼の罵倒に対して50万の出雲民族の急先鋒となり第一弾を送り以て宣戦の布告を成す」と憤怒の筆をとったものである（図2）。2009年2月、サンフランシスコで講演した際、1921年に『出雲民族』と題する定期刊行物が出され、出雲人自身が「出雲民族」意識を明確に打ち出した文

図2 出雲民族という言説



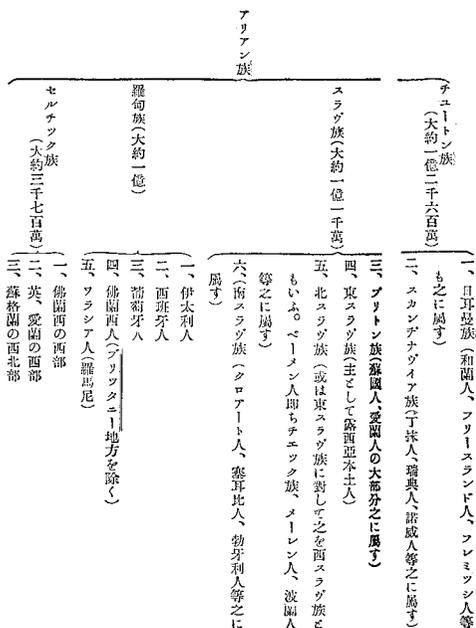
月刊誌『出雲民族』1921年創刊 『神日本』第3号（1921年）

章も出されていることの背景を質問された。関係性は明確ではないが、当時は、第一次世界大戦終結後のパリ講和条約から国際連盟設立へ向け、ソ連、米国から「民族自決主義」が打ち出された時代であり、その影響を受けたことは想像に難くない。

パリ講和会議の年、1919（大正8年）刊行の信平淳平『東欧の夢』（外交時報社）には、三層構造の欧大陸民族構成図が示されている（図3）。これを見ると、当時は複数層からなる民族概念が普通であったことが分かる。

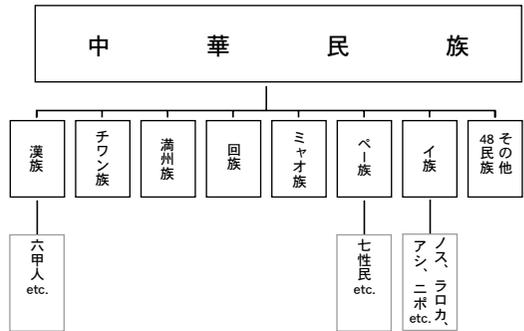
また図4は、中国の民族は、中華民族（第一層）—漢族と五五少数民族（第二層）—これらの下位集団（第三層）の三層からなるとする中華民族概念を図式化してみたものであるが⁴²、これを図1と見比べれば、日本民族（Japanese nation）という概念は、中国における中華民

図3 信夫淳平の欧大陸民族構成図（1919年）



出所：信夫淳平『東欧の夢』外交時報社、大正8年、102～103頁

図4 費孝通（1910-2005年）の中華民族概念



出所：筆者作成

族（Chinese nation）という概念とよく似ていることが分かる。というより、民族という単語を、中国は日本から逆輸入したのだから、中華民族論は、日本民族論の応用だとも考えられる。

檜山鋭『対外日本歴史』（文会堂、1904年6月）は、第5章「日本人種」の結論で、「日本全国を旅行せしもの何人も其容貌に於て、其言語に於て、其性質に於て、其風俗習慣に於て、九州と、近畿と、東北と、同じ九州にても南部と北部との間に於て頗る著大なる差違あるを発見する所なるべし」として、皮膚の色、顔立ち、骨格、髪やひげ等によって、大和、蝦夷、熊襲、筑紫等の（民）族が識別できる旨述べている（43～44頁）。喜田貞吉も『奥羽沿革史論』（1916年6月）で、「ちょっと多人数の集会を見たところで、いわゆる十人十色で、いろいろ異った容貌をしております。その極端のと極端のとを比べますと、素人目に見てもまるで種族が違うことがよくわかる」と述べている⁴³。

今でも「お国自慢」「お国言葉」といった用語で余韻が残っている「国」単位の文化・文物、生活環境の違いが、こうした意識・観念を当然のものにしていただと思われる。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は「出雲再訪」（1896年）で、

こう書き残している。「出雲の人々はいまだに伝統的な製造技術を守っているだけでなく、遙か大阪や他の都市の生産者にも、いわゆる出雲好みの商品をあつらえさせている。だから店頭には並ぶ扇のようなものでさえ、よその国とははっきり異なっている。……衣服や髪形、歌や三味線の調子、そんなものまでが出雲では独特だった。かつてここにいた頃の私は、よその土地に長く暮らしたことがなかったので、出雲の文物のほとんどが、他の地方とは全然異なることに気付かなかつたのだ。今あらためて見直してみれば、青銅器や陶磁器、家庭用品や木工品、農具や漁具といった有形のものから、娯楽、祝日、祭礼儀式にいたるまで、出雲ではすべてが古来の方言と同じく、独自の調子を帯びていたのである」⁴⁴。19世紀末の段階で、服や髪型といった容姿、言葉、風俗習慣、使用する道具に至るまで、出雲には、他国と明らかに違う独自の文化が残存していたということだ。

今の日本では、こうした論説を、にわかには信じられない人が多いと思う。それほどに、列島社会の長い歴史からみれば、きわめて短時間の間に、同質化、画一化が進行し、ずっと昔から同質社会だったという幻想が蔓延するまでに至っているのである。しかし、ちょっと視点を換えれば、ハーンや檜山や喜田が言ったことが、決して誇張した認識ではなかったことが理解できよう。

すでに小熊英二が明らかにしたように、戦前の日本では、「我国は古来日向に天孫族あり、出雲に出雲族あり、北に蝦夷族あり、九州に熊襲あり、隼人あり」（津田剛、1941年）⁴⁵といった混合民族論が主流だった。2009年3月、サンフランシスコ州立大学で、この混合民族論について講義した時、白人の受講生から、「大和

と出雲、蝦夷、熊襲などは、見た目で違いが分かるのか」との質問を受けた。筆者は「今はできない」と答えるとともに、彼に「Japanese American, と Korean American と Chinese American が、今見ただ目で識別できるか」と問い返した。彼はできないと答えたとし、カリフォルニアに1年住んでみて、筆者も識別できないことを実体験した。

在日日本人と在韓韓国人、在中中国人であれば、服装や持ち物、立ち居振る舞い等から、言葉を使わずとも、1990年代半ばまでは、ほぼ確実に識別できた。アメリカに住む白人には、それすら識別できなかったかもしれないが、自身が東アジア人である日本人と韓国人、中国人は、髪型やファッション、靴、身のこなしや雰囲気などで、たいていの場合、相互を識別できた。1990年前後までは、同じ中国内の延辺朝鮮族自治州で、漢族と朝鮮族の女性が、民族衣装など着ていなくても、髪型等で識別できるという話を、複数の人から聞いたことも覚えている。

日系、韓国系、中国系アメリカ人が見た目では識別できないのは、同じアメリカ社会の文化や価値観の中で暮らし、髪型や服装はもとより、英語を使った意思疎通に伴う身振り手振り＝英語文化に付随する価値観（風俗習慣は立ち居振る舞いに現れる）も、共通しているからだろう。日本暮らしが長い韓国人や中国人が、見た目では識別できなくなるのも、同様である。1990年代初め、当時で日本暮らしが10年以上になっていた韓国人の友人が、韓国へ帰ると、街中でよく日本人だと間違えられると言っていたのを覚えている。2000年代に入ると、在韓韓国人や在台湾漢民族と在日日本人の区別も、青年層でつきにくくなってきた。グローバリズムの蔓延も重

なり、生活環境やファッションなどの美観が類似化（西洋化）してきたためだと思う。韓国や台湾のドラマや俳優が日本で人気を得るようになった理由も、そこにあると思われる。

翻ってみれば、東アジア内の民族間の見た目の違いとは、主として文化を反映した風俗がかもし出す、見た目の違いだといえよう。顔立ちや骨格、肌の色等のある程度の違いは、風俗習慣による見た目・感じ方の違いで目立たなくなる。2007年、沖縄を訪れた時、宮古人出身者が同じ宮古諸島の池間島の人は「外人さんみたいだ」と言っていたが、宮古諸島の中で唯一の漁撈民で、池間民族を自称する人々がいることも、故あることだと思われる。筆者もそうだが、外国暮らしをしてきた人々が「国籍不明」と揶揄されるのは、半分は冗談ではない。「ほりが深い」と言われる筆者は、日焼けすると「日本人に見えない」とよく言われる。だが考えてみると、そう言われている人は、けっこう多い。本当は同じでないのに、同じだという幻想に漬かっているから、「日本人に見えない」と言われる日本人が、日本の中にたくさんいるのだ。現代日本に、眉毛を剃り落としたお歯黒の女性が現れたら、同胞だとは思えない。江戸時代の既婚女性はみなそうしていたが、現代日本人の風俗習慣にそぐわない＝親近感を持ってないからこそ、時代劇は偽りを表現しなければならないのである。九州の地を初めて踏んで9年になるが、九州には、南方系の風貌の人が、関西や関東より、明らかに多い。

20世紀前半までの日本で、列島各地の人間の間、見た目での差異がかなりあったという言説は、誇張ではない。今とは違い、封建時代の余韻が残る明治前半期頃までは、身分の違いによる、見た目の違いも大きかったろう。それ

に「言語不通」（拙稿参照）が加われば、「同胞」だと思う方がより無理がある。文化や生活習慣、それを反映した身なりや言葉、立ち居振る舞いの違い、いわゆる文化の違いが、その領域が歩んだ歴史とともに、民族の違いを創り出す。標準語が浸透し、テレビ等を通じた文化や情報、全国チェーン店などに象徴されるモノ、サービスの同質化が、急激かつ過度に進んだ今の日本では、単一民族観が浸透しやすい状況がある。高度経済成長以降に生まれた世代には、それが物心ついた時には所与のものであった。それ故に、戦前世代と戦後世代の単一民族発言には、違いがある。

1986年11月下旬、衆議院の文教委員会で塩川正十郎文部大臣が行った「ルーツはたくさんあったけれども……文化的に見ました場合には、日本民族はやはり一つの民族になっているのではないか」（26日）、「今同じ文化的な生活をしておる者、こういうことでは日本列島は現在一つの民族という解釈も成り立たないことはない」（28日）という発言は、高度経済成長以前を知る世代の意識を表している⁴⁶。以前は違ったが、「同じ文化的な生活」をする中で、一つの民族になったのではないかという（中曽根首相の単一民族発言が物議をかもした国会審議の中での）答弁は、塩川氏自身が、同じでなかった時代を実体験としてもつ世代だったからだろう。

松前健は「かつて、出雲民族という先住民族がいて、全国的に分布していたが、後に渡来した大和民族、もしくは天孫民族によって制圧されたのだというような異民族説が唱えられたが、現在では通用しない」と述べているが、こうした戦後日本の民族論は、民族を科学的に分類しようとしたソ連・中国の社会主義民族理論

の影響を受けたものといえる。

だが、再三いうように、民族を民族たらしめるものは、つまるところ、民族意識とそれを裏付ける、特に歴史上（それに加えて文化、宗教、言語上）の客観的根拠（若干でもいい）である。戦後、科学的民族分類が流行する中で、水野祐が「出雲民族という場合には、出雲文化と言われるべき一つの文化複合体を共有する人群を意味するので、たとえ人種的には同一人種的構造をもつ人びとであっても、共有される出雲文化が日本文化と本質的に異質のものであるならば、やはり人種的・形質的異同とは関係なく、出雲民族という概念は成立する」と述べているのは、「日本文化」を「大和文化」と置き換えるべきではあるものの、刮目に値するといえよう⁴⁷。

4. 単一民族ではなく、同質民族ならいいのか？

最近になっても、閣僚の単一民族発言は、散発的に発生している。1980年代後半以来、「単一民族」という単語を閣僚が口走ると、直ちに北海道アイヌ協会のコメントをとり、責任を問うという条件反射的な対応が、メディアを中心に見られる一方で、1986年の中曽根元首相発言の時のような、国会でその発言の趣旨を、日本国内の民族問題と絡めて議論するということは行われなくなったのは、ある意味で、憂慮すべきことである。単語を封じこめるだけでは、意識を変えることはできない。その発言の趣旨、背後にある意識を吟味し、議論しなければ、発言者だけでなく、多くの人々が「言葉狩りだ」という不満・反発を抱きつつ、従前の意識を潜在化させるだけである。2008年秋の中山成彬国土交通大臣の「単一民族発言」の経緯を見て

も、その憂慮は深まるばかりである。

2008年9月25日、大臣就任後の記者懇談会で、外国人観光客の誘致策を問われた中山国交相は、「日本はずいぶん内向きな、単一民族」で「あまり世界との交流がなく内向きになりがち」なので、「国を開くというか、日本人が心を開かなければならない」と発言し、他の失言も重なって、辞任した。国土交通省がアイヌ関連施策の担当省で、また同年6月のアイヌ先住民族決議の直後でもあったことも、影響しただろう。中山氏は大臣辞任後の9月29日、産経新聞の取材に対し、観光振興に関して、なぜ日本人は内向きなのかという質問があったので、「やはり島国の中で長い間、他国との交流があまりなかった」という点から、「単一民族というか、内向きな民族」と言ってしまったが、「もう少し開いた民族にならないといけない」という主旨だったので、「同質民族という言葉を使えばよかった」と述べている。

このコメントは、中山氏が大臣辞任後も、問題の本質に気づいていないことを示している。「単一民族」という単語がだめで、「同質民族」ならいいのか。こうした誤解が生じる背景に、「単一民族」という用語のみを槍玉にあげる批判にも、責任があろう。それでは、「文脈からすれば、そんな事はどうでもいい。……日本人は他民族に慣れていないから内向きだと言っていただけだ」⁴⁸という反論を招く。日本人が自らの民族的アイデンティティにかかわる問題として議論すべきなのは、「島国の中で長い間、他国との交流があまりなかった」から「同質民族」だという発想の妥当性である。日本は大日本帝国時代、アジアの広域に進軍し、占領した。アジア地域でこれほど多種多様な異民族と接触している国民は他になかった。「最近来た移民

もいるんでしょうが、基本的には単一民族じゃないですか。西日本……東日本、東北、北海道と、大和に服属していった。それで同じ文化を共有することを通じて日本民族になった。そういうことじゃないんですか⁴⁹という疑問も、「単一民族」という単語のみを槍玉にあげる批判では、同様の問題が起こるたび、抱かれるだろう。

拙稿「島国観再考」(『福岡県立大学紀要』18巻2号、2010年)で検証したように、日本は周囲を海で隔てられた島国であり、その孤立した世界で長い歲月暮らしてきたため、日本人は均質・単一な民族となり、独自の文化を育てる反面、閉鎖的な島国根性を身につけたという認識は、虚構・幻想にすぎない。農耕社会が閉鎖的な社会となることは多々指摘されるところだが、1950年代後半以降の高度経済成長に伴って、農村離れ、都市部への人口移動と日本各地での都市化の進行、第二次、第三次産業の急激な増加に伴う第一次産業人口の急激な減少、核家族化を経た1980年代の日本で、農耕民族だから閉鎖的で同質的というのは、根拠として成立たない。だが、1960年代以降の日本社会が同質的で閉鎖的であることは、確かなことである。というより、拙稿『言語不通の列島から単一言語発言への軌跡』(『福岡県立大学紀要』17巻2号、2009年)で検証したように、言語その他の面で、日本人社会の同質性は、高度経済成長以前より、高まっている。したがって「孤立した島国の農耕民」だから、同質民族というのは、いっそう根拠がない。戦後の日本人社会の同質性が高まった原因としては、民族性以外の理由があると考えねばなるまい。その原因は、戦後日本の企業社会化であると、筆者は考える。

おわりに

現在の首都圏や関西圏では、「単一民族」発言が問題になる際は、アイヌ民族や在日コリアンの存在と関連づけられることが多いと思う。そうした地域に住んでいると気づきにくいですが、それ以外の地域では、出雲民族意識以外にも、熊襲、隼人、蝦夷意識が、潜在的に存在し、アイヌ民族や在日コリアンの存在以前に、日本が単一民族だなどと思っていない人が多いように思える。また「琉球民族」「沖縄人」とくくっている人の中にも、「池間民族」を主張する人々(宮古諸島池間島出身者)が存在する(図5)。

図5 池間民族という言説



インターネットで「出雲(民)族」で検索すると、1万件以上ヒットする。6年前、移り住んだ九州では、熊襲や隼人意識が現存している。九州出身の大学の同僚は「私は熊襲だと思っている」(熊本出身)「そもそも九州では、自分達が単一民族だなどと思っていない」(福岡出身)とあっさり言う。元サントリー社長の東北「熊襲」発言が強烈な抗議行動を巻き起こしたのは1980年代後半のこと⁵⁰。越地域では、「奴奈川族」という意識があり、2006年夏には、宗像市で「宗像族と出雲族」というタイトルの

講演会⁵¹も行われた（図6）。

図6 ヌナカワ族、宗像族という言説



出雲民族という概念は、「古代」や「上古」に関連した話の中でよく使われるが、民族という言葉が1890年前後以降の産物であるから、それ以前に出雲民族は存在しないし、語られもしていない。これは大和民族も日本民族も同様であるが、1890年代以降の日本で、「今」生きている者たちが、自身の姿を過去に投影して描いた概念である。したがって、それは紛れもなく、太古や上古ではなく、近現代の人々の意識的産物なのである。現代に生きる私達が歴史に興味を抱くのは、自らのルーツを探り、自分は何者かというアイデンティティを見出したいがためであろう。そして（大和によって改ざん・歪曲される以前の）出雲の歴史を知った出雲人の中には、まず大和民族というアイデンティティは生まれ得ない。

昨今、愛国心教育への関心が高まっているが、民族国家・日本を構成するマジョリティ民族の名称が存在しないし、在日コリアンなどからマジョリティだと思われている人々が、自分は何民族か分からないという。日本という国号がいつ出来たのか、現行憲法で民族国家・日本の象徴とされている天皇がいつから存在するの

か（神武天皇という架空の人物を教えた戦前の教育は別とし）、ほとんどの日本人が知らない。ここに、民族国家・日本形成の問題があり、戦後はそれが未解決のまま、曖昧になったまま、今に至っているのである。それが、今の自分達は何民族か分からない大量の日本人を生み出している。愛国心といいながら、愛すべき対象が曖昧で見えない。2000年代以降、日本の中で反中・嫌韓主義やゼノフォビアが台頭し、それに共鳴する人々が増えたが、近現代日本における民族の形成過程を知らず、愛すべき自らのNationが見出せない人々の迷走ではないかと、筆者には思われる。

戦後の日本社会は、人種や民族を曖昧にすることにより、人種や民族による社会的な不安定要因がないかのごとく印象づけ、また今もそう思い込みたがっているように見受けられる。日本では90年代以降、多文化共生社会という言葉が広まったが、その対象は往々にして「国籍」概念に基づいた「外国人」であり、民族という観点でとらえていない。多文化・多民族共生を支持する人々の多くも、依然として「単一民族国家」幻想の中にあって、日本国籍者自体が多様な民族（あるいはエスニック・グループ）の集合体であることを認識できないでいる。「民族」という問題のたて方をすれば、「自分は何民族か」という、戦後曖昧にしてきた日本人内部の各々のアイデンティティを、はっきりさせなければならなくなる。今やコリア系日本人（Korean Japanese）と呼び得る人々が50万人にのぼり、年間婚姻数の5%（東京では10%）が国際結婚という日本社会で、本来「民族問題」「人種問題」であるものが、いまだなお「外国人差別」「外国人問題」という文脈で捉えられている原因もそこにあるのではない

か。日本人の内なる民族構成と民族意識を明らかにすることが、今後ますます多民族化していく日本社会にとって重要な作業であると、筆者が思う所以である。

注

- 1 http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1211084117.
- 2 <http://smcb.jp/ques/1006>.
- 3 Nationは、フランス革命によって「国家を構成する個人全体によって組織される法的人格」として使われ、「国民」ひいては「国家」自体を示す言葉となるが、もともとラテン語のnatioに由来し、「異教徒」「出身、言語、文化の共有によって特徴づけられる人間のまとまり」を意味する言葉だった。明治前半期の英和・和英辞書を見ると、nationは「人民」「国民」「国人〔クニタミ〕」と訳されている。これでは、nationの本来の意味は、表し得ない。そこで明治半ばに至って創られたのが「民族」という用語であったといえよう。
- 4 第100回国会衆議院会議録第4号、昭和58年9月12日、4頁。
- 5 失言王認定委員会『大失言』情報センター出版局、2000年7月、186～187頁。
- 6 国会図書館調査及び立法考査局『『単一民族』発言に関する国会審議リスト』（平成19年2月5日）によれば、1986年9月から11月の3ヶ月間で、12件の質疑応答—衆議院本会議及び予算、法務、外務、内閣、文教委員会、参議院本会議及び決算委員会—が行われている。
- 7 第107回国会衆議院予算委員会議録第1号、昭和61年10月3日、41～42頁。
- 8 第107回国会衆議院予算委員会議録第3号、昭和61年11月4日、13頁。
- 9 これは私見の部類に属すると思われるが、中曽根

首相は「アイヌ人と日本人、大陸から渡ってきた方々は相当融合しているという。私なんかも、まゆ毛は濃いし、ひげは濃いし、アイヌの血は相当入っているのではないか」（第107回国会衆議院会議録第7号、昭和61年10月21日、12頁）とも述べてもいる。

- 10 第107回国会衆議院会議録第7号、昭和61年10月21日、12頁。
- 11 第107回国会参議院会議録第8号、昭和61年10月31日、11頁。
- 12 第107回国会衆議院予算委員会議録第3号、昭和61年11月4日、13頁。
- 13 第107回国会衆議院文教会議録第2号、昭和61年11月26日、27頁。
- 14 第107回国会衆議院文教会議録第3号、昭和61年11月28日、14頁。
- 15 第107回国会衆議院文教会議録第3号、昭和61年11月28日、15頁。
- 16 第112回国会衆議院文教委員会議録第3号、昭和63年3月30日、11頁。
- 17 以下、松本の言説は松本芳夫『日本の民族』慶応通信社、1954年、46頁に基づく。
- 18 上田正昭『アジアのなかの日本古代史』朝日新聞社、1999年、37～40頁。正倉院文書の一つ、天平2（730）年の「大倭国正税帳」には「大倭国印」が押してある。
- 19 以下、檜山の言説は檜山鋭『対外日本歴史』文会堂、明治37年、10～15頁に基づく。
- 20 麻生大臣は、この発言について、同（2005）年12月の国会で「他の国々と比べて民族、言語、文化が大幅に入れ替わることがなかったのが日本で、比較的まとまった形で継続してきたという日本の特徴を述べたもの」（参議院沖縄及び北方問題に関する特別委員会会議録第1号、平成17年12月6日、5頁）と釈明している。だが、民族、言語、文化が「入れ替わった」国などあるのだろうか。一般的なものは、周辺諸国への侵略による国土の拡張や植民地化に伴う

- 併合に伴う国境の変動により民族構成が変化する形で、これは日本の場合にも当てはまる。なおこの時、麻生大臣は質問者・喜納昌吉議員の「沖縄民族の言葉が日本語に組み入れられているならば、私は今日は沖縄の言葉で質問してもいいと思っているけれども、麻生さんはお分かりになるか」との問いには答えなかった。
- 21 堀内光一「自民党政治家の『単一民族』発言を問う」『月刊社会民主』2006年3月号、44頁。
- 22 『朝日新聞』2007年2月26日他。
- 23 加藤忠「研究倫理と先住民族アイヌ」『先駆者の集い』第105・106号、2006年3月、12～13頁。
- 24 SUU、2008年6月10日、blog.goo.ne.jp/ainunews。
- 25 please oshiete、2008年7月28日、Yahoo Japan! 知恵袋 (<http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp>)
- 26 SUU、2008年6月25日、blog.namako.versus.jp。
- 27 海野車両、2008年6月7日、blog.goo.ne.jp/ainunews。
- 28 1935年文部省発行の第四期国定地理教科書『尋常小学地理書(巻1)』は、第一「日本」で「我が日本はアジアの東部にあって、日本列島と朝鮮半島から成立している。日本列島は北東から南西へ凡そ5000キロメートルにわたって、太平洋の中に連なっている大小あまたの島々である。その中、殊に大きいのは本州・北海道本島・樺太(南部)・四国・九州・台湾である」として、台湾も「日本列島」に含めている。
- 29 拙稿「『中華民族』論台頭の力学—民族識別との関連を中心に」『部落解放研究』113号、1995年及び「中国のマイノリティ政策と国際規準」を参照。中国政府は、子どもの権利条約の国内実施状況に関する第一回報告書で、次のように述べている。「中国の民族はすべて、長い間世界の同じ地域の中で繁栄し、仲睦まじく発展し共生してきた悠久の歴史をもつ。そのため56民族はすべて先住者であり、先住民と後で来た者の区別はなく、先住民の子どもの問題は生じない」(国連文書CRC/C/11/Add.7, 21 August 1995, paragraph 266)。
- 30 <http://smcb.jp/ques/1006>。
- 31 MVP、2008年11月24日、blog.namako.versus.jp。
- 32 池内昭夫のブログ、2008年6月21日、<http://plaza.rakuten.co.jp/ikeuchild/diary/200806210000>。
- 33 池内昭夫は1960年生まれで、2007年大阪府高槻市議会議員選挙に民主党公認で立候補している。池内とユウの発言は、Hanako Tokita, *Ainu recognized as indigenous people*, Global Voices, August 12, 2008 (<http://globalvoicesonline.org/>)に転載されている。
- 34 ユウ、Yahoo!ブログ、2008年6月14日、http://blogs.yahoo.co.jp/uni_21st/21986217.html。
- 35 <http://digest2chnewsplus.blog59.fc2.com/blog-entry-14594.html>。
- 36 網野善彦「東国と西国、華北と華南」(荒野泰典他編『アジアの中の日本史Ⅳ・地域と民族』東京大学出版会、1992年)233頁。
- 37 徳谷豊之助「出雲民族考(1)」『島根評論』11巻3号、1934年3月、11～12頁。同「出雲民族考(16)」『島根評論』12巻10号、1935年10月、58～59頁。その徳谷も「明治以来……他国に移住するもの多く、……又他よりの移住者も鮮くないから、流石出雲民族の血液も次第に薄くなって行く事と思ふ」と述べている。
- 38 田畑修一郎(1903〔明治36〕年～1943年)は、美濃郡益田町(現島根県益田市)出身の作家。『出雲・石見』は2004年、ハーベスト出版から復刻版が刊行されている。
- 39 田畑修一郎『出雲・石見』ハーベスト出版、2004年、9頁。
- 40 難波利三(1936年生)は島根県邇摩郡温泉津町(現大田市)出身の小説家。
- 41 難波利三「出雲の不思議」『歴史読本』1985年7月

- 号、44～45頁。
- 42 詳しくは、拙稿「『中華民族』論台頭の力学—民族識別との関係を中心に」『部落開放研究』107号（1995年12月）を参照。
- 43 喜田貞吉「蝦夷の馴服と奥羽の拓殖」『喜田貞吉著作集9 蝦夷の研究』平凡社、1980年、49頁。
- 44 小泉八雲「出雲再訪」（遠田勝訳、平川祐弘編『明治日本の面影』講談社学術文庫、1990年）327頁。
- 45 津田剛「世界の大勢と内鮮一体」（国民総力朝鮮連盟防衛指導部、1941年）、小熊英二『単一民族神話の起源—く日本人—の自画像の系譜』新曜社、1995年、244頁。
- 46 第107回国会衆議院文教委員会議録第2号、昭和61年11月26日、27頁。同第3号、同年11月28日、14頁。
- 47 水野祐『古代の出雲』吉川弘文館、1972年、142頁。
- 48 「中山大臣の失言—当たり前の事を言っただけけど」2008年9月27日 (<http://www.pikara.ne.jp/boris/Hitorigoto/Hitorigoto573.htm>)。
- 49 フジ「ウタリ協会“歴史認識に問題”」に対するコメント、2008年9月29日 (<http://blog.goo.ne.jp/ainunews>)
- 50 1988年2月、TBS「報道特集」で東京遷都問題を扱った際、当時のサントリー社長（兼大阪商工会議所会頭）が、仙台遷都論に反対する中で、「東北は熊襲（蝦夷と混同）の産地。文化程度も極めて低い」と発言。これに対し、東北、九州の双方で反感を買い、仙台市内の酒屋や歓楽街からサントリー商品が消え、東北の民放ではサントリーのCM放送を廃止するなどした。今でもサントリー製品は飲まないという人が少なくないという。
- 網野善彦『「日本」とは何か』（講談社、2000年）は、この事件について次のように記している。「1980年代半ば、ある著名な洋酒会社の社長が、テレビの首都移転問題の討論で、仙台が名乗りを上げたのに対し、「あのような熊襲の住んでいる未開なところに、首都が遷せるものか」という趣旨の発言をして大変な物議をかもしたことがある。これはかつての征服者の流れをくむ関西人の発言であり、さらに「熊襲」と「熊襲」を間違えたため、東北だけでなく、九州でも強烈な反発が巻き起こったが、この直後、東北を旅した時、東北人の怒りを直接経験した。一生この会社の商品のウイスキーは口にしないとといった友人は今もそれを守っているし、この会社の商品の売り上げはガタ落ちだったと聞いている」（109頁）。
- 51 2006年7月15日、宗像ユリックスで行われた“神の里”宗像シリーズ第4回「出雲族と宗像族」。案内には次のように書かれている。「出雲族は、大国主神を祀る人々で、製鉄を主力とする工人集団」で「宗像大神を祀る宗像族は、海人族とも呼ばれる航海術に長じた一族」であり、二者には「氏族間の深い関わり」があり、「両族は、文化や技術が先取りできる生活環境を作りながら、共に活動している」。